

全日本自動車産業労働組合総連合会 (自動車総連)

会 長 金子 晃浩



1. 近年の賃上げに関する評価や今後の課題

自動車総連では、2019 年から賃金の取り組みを「絶対額を重視した取り組み」と称し、“上げ幅”から“絶対額”に力点を置いた取り組みにシフトした。大手準拠から脱却し、各組織で「自らの目指すべき賃金水準」を設定し、現状とのかい離を是正するための原資を確保していこうというものである。毎年、着実に継続した賃上げが図られてきており、全体としては一定の成果を挙げることができていると認識している。

近年の賃上げに関しては、日本経済の好循環や人材確保・定着に向けた自社・産業の魅力向上、物価上昇・実質賃金の低下から組合員の生活を守る必要性、また、激化する競争環境に打ち勝つためのモチベーションの維持・向上が不可欠であるとの認識が労使で一致した結果、これまでにない賃金引上げを実現することができた。特に中小組合においても賃金改善分の獲得割合が大手と同等の9割を超える結果となったことは大きな成果である。

一方で、働く者の総合的な労働諸条件の底上げ・底支えに向けた取り組みは未だ途上であり、特に300人未満の中小組合の獲得額が最も低い状況に鑑みれば、賃金改善が実現できる環境整備に向けた取り組みは引き続き必要である。また、若年層への賃金配分の高まりから、賃金カーブの傾斜が緩やかになりつつあり、知識・技能を有する中堅社員の努力・成果に報いる配分になっていない点も課題である。

今後に向けては、価格転嫁を含む企業間取引の適正化のさらなる進展や生産性向上に資する施策の実現を推し進める必要がある。また、自動車産業の将来動向やグローバルで見た時の日本の立ち位置などを踏まえた賃金のあり方を検討し、各組合の賃金課題の解決や自社の置かれている中長期的な視点に基づき「自らの要求」の構築に向けて取り組みを進めていくことが求められる。

2. 人材の確保・定着・育成に関する問題意識と対応

自動車産業における人材の確保・定着は、産業の存続にかかわる重要な課題である。特に自動車産業を含む金属関係における生産工程の職業への求職者は減少を続けており、産業の持続的な発展のためには魅力ある労働諸条件の実現が不可欠である。

人材の確保・定着に向けては、働き方改善を通じた生産性の向上や労務費を含む価格転嫁、企業間取引の適正化をさらに進展させる必要がある。また、物価上昇を踏まえ、働く者の生活を守る観点や実質賃金向上の観点を重視して取り組みを進めることが求められる。

さらに、本年は、30年間変わっていない「年間休日増の取り組み」も方針に掲げた。まだ生産体制が十分に安定せず、納期に時間がかかっている中では難しさもあると思うが、働きやすい職場環境を実現し、産業の魅力を高めるためにもこの取り組みが必要だと判断した。加えて、若い人たちが自動車業界の将来性に魅力を感じ、いきいきと働ける職場環境を整備することが重要である。高校卒の就職者数が減少している現状を踏まえ、大学卒の人たちにも技能職を希望してもらえようような取り組みや、DX（デジタル化）、IT、AIの活用など「機械と人間の共存」を追求することで、人手不足を補うことができると考える。

3. 今後の運動の展望

◆目指すべき方向性

自動車総連は2022年に結成50周年を迎えた。この節目にあたり、今後の10年を見据えつつ、自動車総連としての運動がどうあるべきなのかについて論議を重ね、“目指すべき方向性”を以下5つの観点にとりまとめ、それらを実現するために8つの提言を行い、中長期で進めている。

【“目指すべき方向性”】

- ①「日本の魅力を高める」
- ②「自動車産業の優位性(魅力)を維持・向上させる」
- ③「働く者の魅力を高める」
- ④「地域との結びつきを高める」
- ⑤「労働組合の存在意義を高める」

【“目指すべき方向性”を実現するための8つの提言】

- ① 自動車総連の政策や、政策を実現するための取り組み方を見直す
- ② 産業を支える中小企業を中心に、各業種とそこで働く仲間の支援を強化する
- ③ 雇用問題への対応にとどまらず、産業内での中長期的な人材確保スキームを構築する
- ④ 日本の強みであるモノづくりをはじめとした、クルマにかかわる魅力をより広く伝承する
- ⑤ 各地域の状況や実態に応じた活動を推進する
- ⑥ 同じ職場で働く「仲間づくり」「仲間の拡大」を推進する
- ⑦ 国内外におけるカウンターパート機能を強化する
- ⑧ 自動車総連を将来にわたり信頼され必要とされる組織とする

これら5つの観点・8つの提言を基に、自動車総連は引き続き働く者のために尽力していく所存である。

◆取り組みの「根本」を知る必要性

なお、昨今の労働運動の推進にあたり、あらためて意識しておくべき観点に触れておきたいと思う。

京都伏見に「守破離」という私の好きな日本酒がある。この名は元来、千利休の教えに由来する茶道や武道に伝わる言葉である。修業の過程としてまず師匠の型を徹底的に「守る」ことから始まり、次にその型を「破る」ことで自分に合った型を模索し、最終的には型から「離れ」て自在になることとある。しかしその教えで一番大事とするのは、どんなに独自の型を見出しても根本の精神を見失ってはならない、「本[本]を忘れるな」と強調されている点にある。

皆さんは日常業務の中で、ついつい目の前の作業をこなすことに意識が向くあまり、何のためにその仕事をしているのか、本来の目的を見失ってしまったことはないだろうか。

自動車総連の運動に関しても例外ではないと思っている。方針として掲げた様々な取り組み項

目の一つ一つには組織としての根本が備わっており、そこには明確な意思があるはずである。組織として、労働組合としての役割を果たしていくためには、我々はこのことをしっかりと理解した上で、常に活動にあたるべきだと思う。

◆「面着」の意義の再認識

別の観点でもう1点。新型コロナウイルスの終息宣言が発出されて2年弱が経過した。コロナ禍では、3密回避という言葉も流行し、いわゆるニューノーマルに対応するために、労働組合の活動のあり方も見直しを迫られ、人と直接会わなくても成り立つやり方が求められてきた。実際、会議のオンライン開催や、チャット機能を活用した打ち合わせ、情宣物の紙からデジタルツールへの転換など、様々な改善がなされてきた点は大いに評価されるべき点である。守ってきた型をいい形で破ったわけである。

他方で、つい油断して「人と面着しないこと」だけを目的としてしまったことはないだろうか。全体的な面着機会の減少による活動の消極化が懸念されるところである。元来、組合活動で「面着」を重視してきたのは、単に「人と直接会う」ことではなく、その機会を通じて組合員との接点生まれ、その中でこちらの思いを伝え、現場の生の声が聞けたからである。労働運動の根本は、組合員や現場の声を聞き、それを踏まえて経営や社会に働きかけ、変化を促すことにあるからである。面着にしろそうでないにしろ、自分の思いが組合員に伝わっているか、現場の声が聞けているか、こうした組合としての根本が守れているかどうかを常に意識しながら、職場との向き合い方を工夫していくことが肝要であると思う。

4. 結び

最後に、自動車総連という組織は、総連と単組との間に、他の産別にはあまり見られない「労連」という組織が機能的に配置されており、総連と労連とが固い信頼関係のもと一体的な運営を行っているところに無類の強みがあると自負している。ともに働いている仲間のみんなに『この産業で働いていて良かった』と、これからも、そしていつまでも思ってもらえる魅力ある産業・組織にするためにも、自動車総連に集う仲間たちとともに、労働運動を強力に推進していきたい。